いいまちは―ハローの仲間の軌跡―おはようから始まる。

「ハローの仲間」。その名が表すように各地区の通学路で子どもたちの安全を見守り、あいさつを交わしているグループ。
平成14年に、２人から始まった声掛け活動。ＮＰＯ法人となって今年で10年を迎えた。ピーク時には100人近い会員がいたという。その歩みをたどってみた。【取材　企画財政課】

hello!

時計の針が午前7時半を回る。大竹小学校に通う子どもたちがピークを迎えるころ。

子どもたちに混じって、青いジャンパーのおじさんたちの姿が見える。「PARTNER of HELLO」と書かれた背中の白い文字。手には交通安全の黄色い旗。小学校前の押しボタン式信号の横断歩道に立ち、子どもたちが安全に渡れるよう注意を払っている。

子どもたちの顔を見ては「おはよう」と声を掛ける。子どもたちも、ごく自然に「おはようございます」と返す。毎朝、繰り返される登校風景だ。

学校の前で子どもたちに声を掛けているのは「ハローの仲間」の皆さん。子どもたちとは、すっかり顔なじみのようだ。

大勢の子どもたちが学校へ向かう。

「おはよう」で、子どもの顔が見えてくる。―あいさつ交わして12年―

大竹小学校前で、子どもの見守り活動をする大加瀬俊彦さん（72歳　元町1）は、ここに立ち始めて12年になるという。

雨の日も、風の日も、雪の日も欠かすことなく立ち、あいさつを交わしてきた。冬の厳しい寒さの日も、カイロを体中に貼り付けて立ち続けてきた。子どもたちの顔見たさの一心が、そうさせるのだろう。

会社に勤めていたころ、派遣され市民活動団体の交通安全推進隊の役を務めたこともあるという。退職後、子どもたちの安全を見守る活動への参加は、ごく自然なことであったのかもしれない。

毎朝、大加瀬さんとじゃんけんをして登校するきょうだいもいる。この日は大加瀬さんの負け。

「子どもたちがなついてくれるのが何よりうれしい」と大加瀬さんは目を細める。

小学校に入学したときから卒業まで。そして中学校に進学してからも、言葉を掛け続けることで、子どものことが見えてくる。健康状態だけでなく、温かい家族の様子も分かるような気がすると話す。

カメラに向かって「おはようございます」。大加瀬さんとは、すっかり顔なじみ。

あいさつから培った人間関係。―地域と学校と子どもたち―

「おはよう」と声を掛けても、必ずあいさつが返ってくるとは限らない。しかし、見返りを期待して声を掛けているのではない。あいさつをしてやっている、守ってやっているという上からの目線では決して続かない。それでも次第に「おはようございます」と声が返ってくるのは喜びだという。子どもたちが転んだときなどのけがに備え、いつもハンカチは2枚持っている。これまでも何人も応急処置をしてきたそうだ。

入学以来の顔なじみ。卒業式の前日に「6年間ありがとうございました」と感謝の手紙をもらったこともある。その一言が、大加瀬さんをどんなに喜ばせたかは、想像にかたくない。

hello!

「ハローの仲間の皆さんを始め、子どもたちの見守り活動をしてくれる方たちには、本当に感謝しています」。頭が下がる思いだと話す、大竹小学校の小西啓二校長。

「毎朝、顔を合わせるあの方たちは、子どものことをよく分かっています。顔もしっかり覚えているので、どの子が何時ごろ登校して来るかというのも把握してくれており、時間どおりに来ないと心配して、"まだ来てないよ"と学校に言ってくれることもあります」。

子どもたちとも気軽に接する反面、時には遠慮なく指導してくれることもあるという。あいさつから積み上げてきた人間関係ができているからだと、小西校長は考えている。今は、よその子に注意をしたり叱ったりすることが難しくなってきている。そんな時代、顔を合わせ声を掛けることで培った関係だからこそできるようになるのかもしれない。

毎年卒業シーズンの前に大竹小では、日頃からお世話になっている地域の人たちを招いて「うどんの会」という感謝を込めた会を開いている。地域と学校との関わりの一つの形として、あいさつによる見守り活動の意義が、そこにはあるようだ。

「地域の皆さんに感謝」と小西校長。

「おはよう」の一言が大きな声の輪となる。

―歩み続ける ハローの仲間―

9月28日、エスポワール大竹に「ハローの仲間」のメンバーが集った。NPO法人に認証されて、今年の9月で10年を迎え、「感謝の集い」が催された。

これまでの児童・生徒へのあいさつ運動や見守り活動などを始めとする数々の取り組みが「防犯啓発事業や教育環境支援事業の実施による社会貢献」として、市長から代表理事の田端正則さん（68歳　湯舟町）に感謝状が贈られた。

市長から感謝状が贈られ、感謝の言葉が述べられた。

市長は「行政だけではいいまちはつくれません。皆さんがいいきっかけをつくってくれました」と謝意を表した。

会場のプロジェクターでは、これまでの活動が次々と映し出される。そのときどきの苦労や喜びが蘇ってくるような田端さんの説明に、会員は耳を傾けた。

平成14年4月、「ハローの仲間」は、その一歩を踏み出した。当時、市内の高校、中学校の生徒の問題行動が、大きな波紋を呼んでいた。そんなとき、まちを明るくするために何かできることはないだろうかと、飲食店を営む山口國宏さん（75歳　元町1）と池田耕治さん（69歳　南栄3）の2人が、大竹駅前の花の道広場で、登校中の高校生たちに朝のあいさつをすることにしたのが始まりだ。池田さんらは、お互い自分の店の定休日に、週2日街頭に立てばいいくらいの軽い気持ちだったという。

「家で妻に話したら、毎日やらないと意味がないと発破をかけられ、奮起して毎朝声を掛けることにしました。2日だけじゃ続かなかったかもしれません㈑」と池田さん。

2人で始めたあいさつ運動も、次第に仲間が増え、各地区へと広がった。平成20年にはNPO法人「ハローの仲間」として、活動にもますます熱が入っていくようになる。

駅前でのあいさつ運動は、山口さんの発案で取り組み始めた。

取り組みは、あいさつ運動だけにとどまらない。山口さんの店の壁には、大竹高校の生徒が描いた巨大壁画が飾られた。今では市内のいたるところで目にする巨石アートも、始まりはこのグループの発案だ。大きなプロジェクトとして思い出に残るのは、大竹小学校グラウンドの芝生化だったと田端さんは語る。平成20年の夏に、全校児童とともに4万ポットの芝を植え付けた。10月には青い芝生で運動会が行われた。

今では冬の風物詩となった大竹駅前のイルミネーションは、今年で10回目を迎える。年々電球の数も増え、今では4万もの光がまちを彩っている。

活動を続ける「ハローの仲間」だが、悩みもあると田端さんは頭をかかえる。多いときにはおよそ100人の会員を擁していたが、高齢化の波が押し寄せ、今は40人程度になってきたそうだ。

「まちを明るくしていく取り組みには、やはり若い力が必要。できる範囲でいいから一緒にやりましょう」と田端さんは呼び掛ける。

池田さんも「健康な限り続けていきたい」と、まだまだ意欲は衰えない。

「おはよう」の一言から始まった活動が、大きな声の輪になる「ハローの仲間」の歩みはこれからも続く。

活動の記録写真や資料のファイルを開き、思い出を話してくれた池田さん。

hello!

おめでとうございます

防犯功労者（防犯栄誉銅賞）

大竹市防犯連合会副会長・大竹市更生保護女性会会長
正木 千恵子さん（78歳 御園1）
多年にわたり地域安全活動に尽力し、安全で安心な街づくりに貢献

防犯功労者 中国管区警察局長表彰

大竹市防犯連合会副会長・大竹市地域安全推進員会会長
太田 喜光さん（77歳 東栄1）
多年にわたり地域に密着した防犯活動に尽力し、安全で安心な街づくりに貢献

ハローの仲間のアルバム

平成17年、大竹小学校に自然観察のためのビオトープ整備。

平成16年、駅前の花の道広場に、17基の巨石アートを設置。

平成26年、市制施行60周年を記念した駅前イルミネーション。

平成20年、大竹小学校運動場に、子どもたちと芝を一緒に植え付けた。

自動販売機の売り上げの一部が、イルミネーションにも使われています。